

## ダニエル書7章「獣の恐ろしさと神の勝利」

### 1A 獣の横暴 1-14

1B 大海からの出現 1-8

2B 人の子の現れ 9-14

### 2A 聖徒による御国の相続 15-28

1B 第四の獣の恐ろしさ 15-22

2B いと高さ方による裁き 23-28

## 本文

ダニエル書 7 章を開いてください。私たちはついに、ダニエル書の預言の部分に入っていきます。これまでは、ダニエルが異邦人の国々において、いかに主に従っていったのか、異邦人に対する神の証しを読んでいきました。彼は、ネブカデネザルやベルシャツアルなど、王に対してその見た夢や幻を解き明かしました。7 章からは、ダニエル自身が主によって夢や幻によって、預言が与えられます。そして、それがこれまで彼が生きていたバビロンのことから始まり、ペルシヤのこと、それから先のギリシヤとローマ、さらには神の国に至るまでの流れを見ることとなります。そしてそれは、私たちが生きている世界をも実に鮮やかに描いており、その中で生きる信仰者に希望と勇気を与えくれるものです。

### 1A 獣の横暴 1-14

1B 大海からの出現 1-8

7:1 バビロンの王ベルシャツアルの元年に、ダニエルは寝床で、一つの夢、頭に浮かんだ幻を見て、その夢を書きしるし、そのあらましを語った。

時はおそらく紀元前 553 年です。「バビロンの王ベルシャツアル」の治世の始まりの時に、ダニエルが夢と幻を見ました。私たちは 5 章において、彼が最後にメディア・ペルシヤによって滅びるところを読みましたが、つまりはバビロンがこれから終わるのであろうという予感がする時に、ダニエル自身が神ご自身から希望の言葉をいただきます。バビロンから始まる、人間の国々がどのようになるかの夢を見たのです。彼は自分で寝床でこの夢を見たのですが、それを起きてから自分自身で書き記して、文書に残しました。

7:2 ダニエルは言った。「私が夜、幻を見ていると、突然、天の四方の風が大海をかき立て、7:3 四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。

「大海」の中からの四頭の獣の夢を見ます。大海は、風によってかき立てられていますが、その

荒々しい、人が制御できない世界を映し出しています。黙示録 17 章 15 節において、大きな都バビロンが座っている大水について、「あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群衆、国民、国語です。」とあります。そしてイザヤ書に、「悪者どもは、荒れ狂う海のようにだ。静まることができず、(57:20)」とあります。人の悪によって、世界の国々が荒れ狂っている姿がここに描かれています。しかし、「天の四方の風」がそれを引き起こしていますが、神がご自分の力と主権によって、それらの国々を掌握されている様を描いていると言えます(黙示 7:1 参照)。これまでも出てきた主題でしたが、国々がどんなに暴れていても、それは主が手中に収めておられるのだということです。

そして、そこから「四頭の大きな獣」が出て来ます。それぞれがダニエル書 2 章でネブカデネザルの見た、人の像の夢に匹敵します。バビロンが金の頭であります。ここでは獅子のような獣です。メディア・ペルシヤは銀の胸と両腕でしたが、ここでは肉を食らう熊のような獣です。そしてギリシヤは青銅の下腹と太ももでしたが、ここでは四つの翼と四つの頭を持つ豹です。そして、ローマは鉄のすねと足でしたが、ここでは得体の知れない、自然界には存在しない鉄のきばを持つ獣として登場します。人の見るこれらの国々は金属に代表される栄華を示していますが、神の人ダニエルの見る同じ国々は、そこにある横暴さを見るのです。

7:4 第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。見ていると、その翼は抜き取られ、地から起こされ、人間のように二本の足で立たされて、人間の心が与えられた。

バビロンですが、ネブカデネザルが王となった紀元前 605 年から、ベルシャツアルが殺される 539 年までの間です。「獅子のようで」とありますから、実際の獅子ではありませんでした。この獣は鷲の翼を持っています。ところで獅子は、王権を表す動物として聖書の中でも、歴史の中でも現れます。例えば、ソロモンの王座のわきには雄獅子の彫刻が立っていました。王座の階段にも、「十二頭の雄獅子が、六つの段の両側に立っていた。(1列王 10:20)」とあります。獅子は動物界の王であります。同じように鷲は鳥類の王であります。エゼキエル書 17 章には、バビロンとエジプトを大鷲に例えています(3,7 節)。そしてバビロンの王の宮殿の入り口には、翼のついた獅子の門がありました。ダニエルは、この獅子を毎日というほど見ていたに違いありません。

その獅子の翼が抜き取られ、地から起こされ、人間のように二本足で立たされ、人間の心が与えられたのですが、これは 4 章に出てきたネブカデネザルの姿です。彼が人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、七つの時が過ぎてから、理性が戻ってきました。

7:5 また突然、熊に似たほかの第二の獣が現われた。その獣は横ざまに寝ていて、その口のきばの間には三本の肋骨があった。するとそれに、『起き上がって、多くの肉を食らえ。』との声がかかった。

メディア・ペルシヤ帝国ですが、539年から331年までの間です。この国を表す熊ですが、聖書では、獅子に次ぐ第二の動物として出てきます。ダビデがサウルにゴリヤテと戦う時に、自分にそれができることを説明するときこう言いました。「しもべは、父のために羊の群れを飼っています。獅子や、熊が来て、群れの羊を取っていくと、私はそのあとを追って出て、それを殺し、その口から羊を救い出します。…このしもべは、獅子でも、熊でも打ち殺しました。(1サムエル 17:34-36)」そしてアモス書 5章 19節には、「人が獅子の前を逃げても、くまが彼に会い、…」とあります。ダニエルが、人の像の、銀の胸と両腕を「あなたより劣るもう一つの国が起こります。(2:39)」と解き明かしましたが、この獣の幻の中でも第二の動物として表れているのです。

そして「横ざまに」寝ているという状態が興味深いです。これは、メディアとペルシヤの二つの国を表しているのではないかと考えられます。メディア・ペルシヤ帝国というと連合国のように聞こえますが、事実上、ペルシヤがメディアを吸収しました。ですから、ペルシヤがメディアを凌駕しているということで、ペルシヤ側がメディア側よりも高くするために、横ざまになっているのではないかと思います。そして「口のきばの間には三本の肋骨があった」とありますが、おそらくはこの肋骨は、メディアとペルシヤ、そしてバビロンを表していると考えられます。ペルシヤがメディアを喰らい、そしてメディアとペルシヤがバビロンを喰らいました。かつてのバビロン帝国をこの帝国が手にしているということで、メディア、ペルシヤ、そしてバビロンが熊の口の中にあると言えます。

そしてさらに、「起き上がって、多くの肉を食らえ。」との声がかかりましたが、小アジア(今のトルコ)の西部にあったルデヤとエジプトを征服しました。「肉を食らう」という残忍さはイザヤ書 13章に出てきますが、こう書いてあります。「見よ。わたしは彼らに対して、メディア人を奮い立たせる。彼らは銀をもものともせず、金をも喜ばず、その弓は若者たちをなぎ倒す。彼らを胎児もあわれまず、子どもたちを見ても惜しまない。(17,18節)」歴史の中で、国々の戦いにおいて、残忍な殺し方をしていく姿を見ます。まさに「肉を食らう」姿です。

7:6 この後、見ていると、また突然、ひょうのようなほかの獣が現われた。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。

ギリシヤ帝国です。紀元前 331年から 168年(第三次マケドニア戦争)までの間です。豹はもちろん、獲物を追うときの敏捷さが特徴です。ダニエルが、「見ていると、また突然」と言いましたが、あまりにも急に出てきたので驚いているのです。さらに、その走る速度を加速させるかのように、背に鳥の翼があります。これはギリシヤの特徴をよく表しています。8章と 11章に、ギリシヤを帝国にまで拡大させたアレキサンダー大王と、その後の四分割されたギリシヤの預言が出て来ます。彼は数年のうちに、当時知られた文明化された地をすべて征服しました。西は今のギリシヤであるマケドニヤから南はエジプトまで及びました。そして、東はペルシヤだけでなくインドにまで及びました。とんでもない領土を僅かの期間で奪取しました。

けれども豹の頭は四つあります。翼も四つあります。これもギリシヤ史にあるとおりです。アレキサンダーは若くして夭折しましたが、その後、帝国は四人の総督に分割されました。シリヤ、小アジア、マケドニヤ、そしてエジプトです。このうちシリヤのセレウコス朝とエジプトのプトレマイオス朝が優勢になり、シリヤ・エジプト戦争を何度となく行ないました。これらの預言も8章、そして11章にあります。このギリシヤの影響は文化と言語において、新約時代に大きな影響を与えていますね。新約聖書は実に、ギリシヤ語で書かれました。ローマ時代に入っていたのに、一般庶民はギリシヤ語を使用していたのです。

7:7 その後また、私が夜の幻を見ていると、突然、第四の獣が現われた。それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持っており、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは前に現われたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。

紀元前168年の共和制ローマがギリシヤを倒して、紀元前63年からローマ皇帝による帝政が始まりました。そして東西に分裂しても、西ローマ帝国は紀元後476年の崩壊、そして東ローマ帝国は1453年まで続きました。この獣の描写は、これまで他の猛獣に例えていたけれども、それができない獰猛な姿をしていました。牙が鉄で出来ています。そして、「食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた」とあります。それから頭には十本の角があります。これは、鉄の脚とその後の粘土と鉄の混じった足の十本の指に相当します。

「食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた」とあるのはローマの征服をよく描写しています。紀元前241年から始まったポエニ戦争によって、ローマは速やかに地中海周囲にある国々を征服しました。軍人ポンペイウスは紀元前63年にエルサレムに侵入しました。その後、ローマはヨーロッパを北上し、英国の南部、フランス、ベルギー、スイス、そしてドイツにまで支配を広めました。ギリシヤの場合は、アレキサンダーは征服しても、その被征服民を虐げることはありませんでした。もし蹂躪していたら、あれだけすばやく進出できなかったでしょう。けれどもローマは違います。征服した国々と民の文明を破壊して、粉々にし、捕虜を何千人も殺し、また奴隷として十数万人売りました。

ローマは他の帝国と異なり、四世紀という長期に渡り拡張を続けました。その衰退も長期に渡り、西ローマは紀元後五世紀まで、東ローマは十五世紀まで続いたのです。これは前代未聞の帝国であり、古代ローマの崩壊後も、欧州には西ローマの栄光は遺りつづけ、ロシアには東ローマの栄光が残り続けたのです。そして近代に入り、その復興が見えるようになります。西欧において欧米列強の植民地主義による世界征服です。そしてロシアではソ連邦が始まり、国際共産主義が始まりました。ソ連は崩壊しましたが、ロシアは今もかつての東ローマの野望を捨てていません。けれども、一つにまとまることはありませんから、2章において「粘土と鉄の混じり合った足」の姿に形容されていたのです。

そして、はっきりと知らないといけないのは、このローマ時代に私たちの主キリストが現れたということです。9章において、詳しくこのことを学びます。ダニエル書において、第四の獣の中でキリストが現れたということは、キリストが聖書の定める終わりの時に来られたことを意味しています。人間の歴史において、イエス・キリストが来られ教会が誕生したという事実によって、人間の支配が瓦解し始めた、とすることができるのです。キリストが来られたことによって、ある意味で人間の支配の終わりが始まったと言えるのです。ですから、教会は、神の国を霊的にこの地上に介入せしめる「世の光」であり「地の塩」であります。

7:8 私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があった。

異邦人による王国の衝突と興亡の中で、その獣のような横暴さの先には、この人物があります。罪によって始まった人間の国がこれら獣です。そして人間至上主義の頂点として、この人物が現れるのです。ダニエル書において「荒らす忌むべき者」と呼ばれるようになり、キリストの到来の前に世界を完全に掌握し、そして荒廃をもたらします。その後でキリストの到来によって殺されて、滅ぼされます。そしてキリストが、「反キリスト」と呼ばれる男です。

イエス様は、かなりこの人物について意識しておられました。主ご自身がオリーブ山で弟子たちに、「預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば(マタイ 24:15)」と言われました。そして、使徒たちが福音を宣べ伝えていたところでは、ダニエル書の荒らす憎むべき者について、しっかりと教えられ、警告を受けていたようです。使徒パウロはこう言いました。「なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。(2テサロニケ 2:3-4)」そして、使徒ヨハネはこの男を「獣」と呼び、黙示録 13章において獣の国の姿が描かれています。

ところでこの「小さな角」の特徴についてですが、一つ目はもちろん「小さい」ということです。初めから王のように権力を持っているのではなく、むしろ何でもない所から現われます。二つ目は、「三本の角を引き抜く」ことです。巧みに既に権力を持っている者たちを引きずりおろして、自らがその座に着きます。三つ目は、「人間の目」があることです。ゼカリヤ書や黙示録には、キリストに七つの目があり、その目は御霊であることを教えています(ゼカリヤ 3:9、黙示 5:6)。彼は、神の見方で物事を見るのではなく、人間の見方で物事を見ます。そして四つ目、「大きなことを語る口」があります。話がうまいです。すべて言葉で相手を巧みにだまします。そして大言壮語をいい、神に対して暴言を吐きます。「黙示 13:6 そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い

始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。」

## 2B 人の子の現れ 9-14

そして、夢の情景は、海から現れた獣から、突然、天における神の御座に移ります。2章においては、人手によらず切り出された石が、足のところに当たり、それで像が砕けて、その石が大きな山になった、というところがありましたね。神がキリストによって人間の国を倒され、ご自分の国を立てられるのです。9節からは、神が御国を地上に立てられるに際して、天において行なわれることを示しています。

7:9 私が見ていると、幾つかの御座が備えられ、年を経た方が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりけのない羊の毛のようであった。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、7:10 火の流れがこの方の前から流れ出ていた。幾千のものがこの方に仕え、幾万のものがその前に立っていた。さばく方が座に着き、幾つかの文書が開かれた。

「年を経た方」が御座におられます。これは、文字通りの年寄りではなく、神が永遠なる方であることを表しているものです。「幾つかの御座が備えられ」とありますが、黙示録4章には、ここの幻の詳細が書かれています。24人の長老が座に着き、四つの生き物と共に礼拝を捧げています。そして、「衣は雪のように白く、頭の毛は混じりけのない羊の毛のよう」とありますが、主は完全に聖い方であり、汚れが一切ありません。それから、「御座は火の炎、その車輪は燃える火」とあります。エゼキエル書のことを思い出してください。主の御座の下には、ケルビムがいました。燃える火のようであり、また車輪を持っていました。火は、聖めの火であり、汚れた者に対する神の裁きの火でもあります。そして、「幾千のもの、幾万のもの」が主の前に立っていますが、黙示録5章には万の万、千の千の御使いがイエス様に賛美をささげています。そして、さばく方が座に着いて「幾つかの文書が開かれ」ました。黙示録20章の終わりには、「これらの書物に書き記されているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。(12節)」とあります。

私たちは、この世界で人間中心主義によってもたらされている混乱や動揺を見ている。また、狭苦しさ、閉鎖的な状況を見ている。けれども、主は天につながれた者として、キリスト者をそこから自由にしてくださっています。「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。(コロサイ3:1-2)」

7:11 私は、あの角が語る大きなことばの音がするので、見ていると、そのとき、その獣は殺され、からだはそこなわれて、燃える火に投げ込まれるのを見た。7:12 残りの獣は、主権を奪われたが、いのちはその時と季節まで延ばされた。

天に御座を持っておられる方によって、あの角が滅ぼされます。「燃える火に投げ込まれる」とありますが、黙示録 19 章にはっきりと書かれています。「19:19-20 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拜む人々を惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きてままで投げ込まれた。」

そして、他の獣についてですが、「その時と季節まで」と言っていますね、これは 2 章 21 節でも出て来た言い回しであり、そこでは「神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て」とあります。神の許される期間ということでしょう。興味深いことに、バビロンも、ペルシヤも、ギリシヤもそれぞれが現代に至るまで残っています。バビロンはイラクとして、ペルシヤはイラン、ギリシヤはギリシヤです。かつての大きな帝国の面影はありませんが、生存しています。そして歴史的に見ますと、欧米列強がある意味でローマの色彩を帯びているとするなら、今、その世界秩序が緩んでいる時に、かつての民族や国々の残りが見えてきます。そこにあった民族や国々の対立が欧米列強による世界秩序が緩んでいる時に、かなり昔のことなのに見えてきました。その世界秩序がいかに力強く見えても、やはり人工的なものであり、それが壊されたら、残っているのはその前の民族や国であったりするのです。

そして主の再臨によって神の国を立てられる時に、その残された国々は生き残っているでしょう。マタイ 25 章 31 節には、残されている国々が羊と山羊が選り分けられるように分けられ、羊の国々は御国の中に入ることが約束されています。山羊に分けられた国々はゲヘナに投げ込まれます。

7:13 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。7:14 この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。

天における情景の幻は続きます。ここに、「人の子」という驚くべきキリストの幻が書かれています。イエス様が、福音書においてご自身のことを「人の子」と呼ばれていましたが、それはこのことを意識しておられたからです。世の終わりの日について弟子たちの質問に答えられた時に、主は、答えられました。「マタイ 24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」そして、決定的なのは主がユダヤ人に死刑宣言を受けたのは、人の子が天の雲に乗ってくるという発言からでした。「マタイ 26:64-65 イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりで。なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天

の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」すると、大祭司は、自分の衣を引き裂いて言った。「神への冒瀆だ。これでもまだ、証人が必要でしょうか。あなたがたは、今、神をけがすことばを聞いたのです。」

「天の雲に乗って来られ」とありますが、これは孫悟空のような移動の手段ではありません。雲というのは、聖書の中で神の栄光が濃厚にある時に使われます。そして天というのは、神の御座があるところですが、天における栄光に満ち満ちた中で、という意味合いです。そして、「年を経た方のもとに進み、その前に導かれた」とありますが、黙示録 5 章において、父なる神のところまで小羊が連れてこられて、右手に持っておられる七つの封印の巻き物を受け取られる場面が出て来ます。

そして主は、「主権と栄光と国が与えられ」ることとなります。主が死者から甦られてから、その主権は霊的に現れ出るようになりました。そして主が再び地上に戻って来られるようになって、これは目に見える形で起こります。「諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕える」場面を見ることになります。そして、優れているのは「永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない」ということです。これまでの獣による主権は、一時的です。滅びます。しかし、神の国の主権は永遠で、過ぎることは無く、滅びることはありません。

## 2A 聖徒による御国の相続 15-28

### 1B 第四の獣の恐ろしさ 15-22

7:15 私、ダニエルの心は、私のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は、私を脅かした。

ダニエルはこれまで異邦人の王たちが見た夢や幻を解き明かしてあげました。けれども、自分自身が見た夢と幻については分かりませんでした。この悩みは最後の最後まで続き、12 章で御使いとダニエルが話しているとき、御使いが、「このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられているからだ。(9 節)」と、元々、今の時点では解き明かすことのできない部類のものであることを伝えたのです。これほどまでに生々しい幻なのに、それを知ることのできないもどかしさが伝わってきます。そしてダニエルの恐れは、獣どもの凄まじさ、そしてその獣を滅ぼす神の御力にあっただしょう。神の預言者となったものは、「人間の罪の凄まじさ」を見せつけられることがあります。そして同時に、「神の公正な裁きと、その力」をも生々しく教えられることがあります。

7:16 私は、かたわらに立つ者のひとりに近づき、このことのすべてについて、彼に願って確かめようとした。すると彼は、私に答え、そのことの解き明かしを知らせてくれた。7:17 『これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。7:18 しかし、いと高き方の聖徒たちが、国を受け継ぎ、永遠に、その国を保って世々限りなく続く。』

ダニエルに解き明かしをするのは、御使いたちです。8、9 章ではガブリエルが来ています。10 章

から 12 章には、主イエス・キリストご自身ではないかと思われる方が、ダニエルに教えています。

彼は短く解き明かしました。「四頭の大きな獣は、地に起こる四人の王である」と解き明かしました。これは、これまで解き明かした通りです。そして、新しいことを御使いは語っています。「いと高き方の聖徒たちが、国を受け継ぐ」ということです。神は人をご自分のかたちに造られてから、ご自分が造られた物を人に支配させることを考えておられました。「彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。(創世 1:26)」ご自分が全てのものを支配されているように、ご自分に似せて造られた人にもその支配と所有を与えようと意図されました。だから、人は、所有し、統治をするということにおいて神の目的を果たすことができます。

けれどももちろんアダムが罪を犯して、その支配権を喪失しました。悪魔に移ってしまいました。それを奪還するために神はキリストをこの地に遣わされて、キリストの血によって私たちを贖ってくださったのです。そして贖われた者たちが、神の国をキリストにあって支配する王とし、神の祭司とすることを意図しておられます。「イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解放し、また、私たちを王(国)とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。(黙示 1:6)」エペソ書にも、「天にあるもの地にあるもの、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることになるのです。このキリストにあって、私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。(1:10-11)」とあります。このように、数多く御国を受け継ぐことについての約束があります。私たちは、その備えができていますでしょうか。小さなことに忠実であることをイエス様は教えられました。主に任されたこと、その働き、責任のある働きをしておられるでしょうか？

7:19 それから私は、第四の獣について確かめたいと思った。それは、ほかのすべての獣と異なっていて、非常に恐ろしく、きばは鉄、爪は青銅であって、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。7:20 その頭には十本の角があり、もう一本の角が出て来て、そのために三本の角が倒れた。その角には目があり、大きなことを語る口があった。その角はほかの角よりも大きく見えた。

ダニエルは第四の獣のことが知りたいと興味を持ちました。あまりにも他の獣と違うので、一体何なのか？と驚愕していたのでしょう。そしてその描写を繰り返していますが、先ほどの描写にはなかったものを二つ加えられています。一つは爪が青銅であることです。もう一つは、小さな角が三本の角を倒した後、他の角よりも大きくなっていることです。

7:21 私が見ていると、その角は、聖徒たちに戦いをいどんで、彼らに打ち勝った。7:22 しかし、それは年を経た方が来られるまでのことであって、いと高き方の聖徒たちのために、さばきが行なわれ、聖徒たちが国を受け継ぐ時が来た。

ここに「聖徒たち」とありますが、旧約時代の啓示は難しさがあります。小さな角、つまり反キリストが聖徒たちに戦いを挑み、「打ち勝った」とあるからです。けれどもイエス様はペテロに教会の約束を与え、「ハデスの門もそれには打ち勝てません。(マタイ 16:18)」と言われているからです。すでに主は、ご自分の血と復活によって世と悪魔に打ち勝ち、教会もすでに勝利者とされています。けれどもここでは反キリストが打ち勝つ、と言っているのです。旧約聖書では、キリストがまだ到来していないために、神が与えておられる啓示が新約聖書ほどはっきりしていません。イエス様が弟子たちに、「多くの預言者や義人たちが、あなたがたのしているものを見たいと切に願ったのに見られず、あなたがたの聞いていることを聞きたいと、切に願ったのに聞けなかったのです。(マタイ 13:17)」と言われました。キリストが到来されたことにより開かれた神の啓示があり、それをしばしば「奥義」と呼んでいます。

つまり、神を信じて、この方に仕える者がみな聖徒ですが、新約聖書に与えられた知識に従うと、主に三つの種類の聖徒を挙げています。一つはもちろん教会です。ユダヤ人でも異邦人でも、キリストを信じることにより、御霊のバプテスマによって一つの体になった共同体です。そして、もう一つは患難期における聖徒の姿が、黙示録に出てきます。教会が天に引き上げられ、天で賛美をささげている姿を5章で見ることができます。それから神の怒りが地に下りますが、6章、7章にその間に信仰のゆえに死ぬ、殉教者の姿を見ることができます。そして 20 章に、ヨハネが、天において教会と区別して、患難期に死んだ魂が復活し、千年王国を受け継ぐことを教えています。「また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。(4 節)」教会は、「多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。(4 節)」とありますから、教会と患難期の殉教者を区別しているのです。

そして、イスラエルがいます。ローマ 11 章の最後に、異邦人の救いの完成の後に、イスラエルがみな救われることを教えています。その初穂として贖われた 14 万4千人のイスラエル人が、黙示録 14 章に出てきます。そして患難半ばに荒野に逃げる女イスラエルの姿が 12 章に出てきます。黙示録の最後には天のエルサレムの門にはイスラエル 12 部族の名が記されています。ですから、イスラエルが悔い改めて、再臨のイエス様を自分たちのメシヤとして受け入れるのです。

ですから、御使いがダニエルに話しているのは、教会に対してではなく、患難期における聖徒たち、殉教する聖徒たち、またイスラエル人で神を信じる残された民であると考えられます。特にダニエルはユダヤ人であり、ユダヤ人を意識して彼らのこれからのことを語っている可能性が高いです。教会というのは、新約時代の使徒たちや預言者たちに与えられた特別な啓示であり(エペソ 3:5-6)、旧約聖書に直接的に啓示されている訳ではないのです。

## 2B いと高き方による裁き 23-28

次に御使いが、ダニエルに第四の獣の解き明かしを与えます。

7:23 彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。7:24 十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らのあとに、もうひとりの王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。』

初めに第四の国は、これまでの獣と異なります。「全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。」と言っています。ですから、いわゆる歴史上の古代ローマのことだけを話しているのではなく、むしろそれ以上に終わりの日に世界を君臨する世界統一が行なわれることが見て取れます。黙示録 13 章が、克明にその様子を描いています。このように世界政府のようなものができる土台が出来上がります。

それから、「十人の王」が出てきています。どのような形で世界が十の支配権になるのか、まだ明らかにされていません。けれども、十に区分される時が来ます。かつて西ローマ帝国であった欧州が欧州連合として統一しました。まだ経済の領域での統一ですが、これから政治統一もされるでしょう。彼らが目指しているのは「合衆国」です。アメリカ合衆国のように連邦政府として欧州を一つに国にする予定です。そして世界各地で、今、地域毎の統一の動きが活発になっています。G8 などでは米ドルに代わる、世界共通通貨の議論も起こっています。世界が十に分けられます。

そしてその一つから、反キリストが登場します。先ほどお話したとおり、彼は名の知られない人であり、不意にやって来ます。巧言を使って勢力を得ます。ついに十の地域のうち三つを自分のものとし、そして最後に全世界を自分の足元に置き、自分が世界総統になります。

7:25 彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手によだねられる。

小さな角にあった口は、このように「いと高き方に逆らうことば」を吐きます。彼は巧言により勢力を得て、そして同じく口によって神に逆らいます。「言葉」による神への反発をもって世の終わりが来ます。言葉の力は今の時代、非常に強いです。「表現の自由」という考えは、近代になって現われました。民主主義が、他の政治制度より優位にあると考える時代に私たちはいます。ちょうど鉄と粘土が混じり合った時に何が武器になるかという「言葉」です。そして、言葉狩りによって、人々を支配していつています。そして、偽教師も権威ある者に対する中傷が特徴です。「夢見る者たちであり、肉体を汚し、権威ある者を軽んじ、栄えある者をそしっています。(ユダ 8)」

そして彼は「時と法則」を変えようとし、これまでであった秩序を変えようとするのです。12 章

に、彼は「どんな神々にも心にかけない(37 節)」とありますが、既存の宗教、風習、習慣、従来の価値観などを全て変えようとしています。例えば、同性婚はどうでしょうか？こんなことは、少し前の欧米であっても、想像さえできなかったことです。男女の結婚というのは、つい最近まで誰も疑うことのない標準でした。それがいとも簡単に、変えられようとしています。

そして、「聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。」とあります。預言の時間表を理解するのに非常に大切な期間です。以前お話しましたが、「時」は一年です。ですから足すと三年半になります。ダニエル書の最後にも、亜麻布を着た方が天に向けて両手を上げて、永遠に生きる方を指して誓い、「12:7 それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する。」と言われました。神が聖なる民、つまりイスラエルの民の力を打ち砕き、彼らがへりくだってメシヤを求めるようにする期間として定めておられるのです。黙示録にもこの期間が登場します。「彼らは聖なる都を四十二ヶ月間踏みにする。(11:2)」「この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口が与えられ、四十二ヶ月間活動する権威を与えられた。(13:5)」42ヶ月間は三年半です。そして二人の証人が、「千二百六十日の間預言する。(11:3)」当時の計算にしたがって一年を360日にすれば、1260日は三年半です。そしてイスラエル人について、「一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。(12:14)」とあります。これをイエス様は「世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難(あるいは大患難)があるからです。(マタイ 24:21)」と言われました。御使いガブリエルがダニエルに伝えた、第七十週の後半の三年半の期間です。

7:26 しかし、さばきが行なわれ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。

偽のキリストがこのように世界を荒廃へと至らせましたが、本物のキリストが偽キリストに裁きを下されます。主が地上に戻って来る時にこれを行なわれます。テサロニケの手紙第二にはこうあります。「その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。(2:8)」

7:27 国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』

反キリストをキリストが滅ぼされた後、キリストが御国を立てられ、そして聖徒たちにもその統治を委託されます。キリスト者は、ここに出て来る聖徒たちと同じように、その世俗の国々の支配の中でもまれて、反対や迫害さえ受けかねない存在ですが、私たちには各々、任せられた務めがあり、その小さなことに忠実になり、主に仕えるのです。その責任こそが、私たちが将来、御国を受け継ぐ備えになるのです。私たちが、創造的な働き、責任ある働きをするからこそ、将来の御国を豊かに、恵みをもって受け継ぐことができます。生活ではいろんなことがあるでしょうが、けれども、

それらは過ぎ去るのです。しかし私たちがしていることは、将来に直結することなのです。

7:28 ここでこの話は終わる。私、ダニエルは、ひどくおびえ、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心に留めていた。」

ダニエルは夢の解き明かしを聞いたら、なおさらのこと恐ろしくなり、顔色も変わっています。けれども、「心に留めて」いました。今は分からないけれども、後に分かるかもしれないから心に留めていたのです。「いったいどういうことなのかなあ。」と思い巡らしながら日々を過ごしていました。ヨセフが夢を見たときのことです。彼が太陽と月と星が自分に伏し拝んでいる、という夢を見たとき、ヤコブは叱りました。けれども、「このことを心に留めていた(創世 37:11)」とあります。後にヨセフがエジプトの総理大臣になっている姿を見て、もちろんその夢の意味するところを知ることになりました。イエス様の母マリヤもいます。イエス様が神殿で学者と話しておられたとき、心配していた両親が、「あなたを捜し回っていたのです。」と叱ったところ、「どうして、わたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。(ルカ 2:49)」と言われました。この意味が分かりませんでした。が、「母はこれらのことをみな、心に留めておいた。(51 節)」とあります。

私たちも、「これからどうなるのか？」と悩む時があると思います。「神がこう約束しておられるけれども、一向にその兆しは見えない。むしろ反対に見えることがいろいろ起こっている。でも、約束されたのが神なのだから、どうなるのか待っていよう。」と思い巡らすのです。今は分からないけれども、いつか神が全てを明らかにしてくださいませ。